

先月末の日曜日、朝日町の町民でつくる「白い紙ひこうき大会実行委員会」が企画した「桜咲く木造校舎めぐり」のイベントに参加した。

朝日町に閉校になったまま残されている四つの学校の木造校舎のうち、二つが二〇〇九年度までに取り壊されるため、その前にその姿をこの目に焼き付けておきたいと、最後の想い出づくりとして企画されたものだ。町民ばかりでなく、仙台や山形からも参加者があり、幼児も言

田舎にす 暮らす

岩崎孝彦

め四十人余りが集まった。校庭の桜は満開を過ぎていたが、散る花を愛でながら木造校舎のぬくもりを味わった。それよりも、四つの木造校舎をめぐりながら、取り壊さなければならぬ世情を考えさせられる花冷えの一日でもあった。

◇
旧西五百川小学校大舟木分校
後ろに山がせまる山あいの学校。明治四十二年の建築。今年でちょうど百年目。木造二階建て、連窓のガラス窓の上下の壁は漆喰塗り。分校らしい可愛い

文化



桜咲く木造校舎めぐり

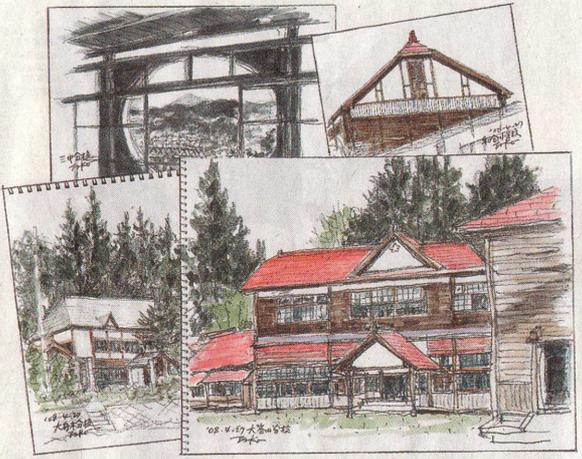
校舎。竣工時は瀟洒な建物であつたらう。小さな前庭に二本の樅の木が校舎に覆いかぶさるように残っていた。奇麗な屋根が印象的。

◇ 旧和合小学校

創立明治八年の学校。朝日町特産の無袋りんごの中心地・和合の平地に立つ。現在の校舎は昭和二年の建築。その後体育館などが増築されている。

今年三月閉校になった。木造二階建て、校舎の屋根からとび出した換気塔や校舎の妻壁のデザインが印象的。外壁は下見板張り。広い運動場がある。

◇ 旧西五百川小学校三分校



明治十五年の建築。朝日町の文化財。木造三階建て、外壁は蔵づくり(に似た漆喰塗り)、三階の丸窓が印象的。二階の教室の天井がゆるいアーチ状をしていることなど擬洋風建築物。以前この「田舎で暮らす」で取り上げたことがある。なんともユニークな建物である。平成八年まで実際に分校として使われた。百十数年の星霜。

◇ 旧大谷小学校大暮山分校

大正三年の建築。山あいに立つ堂々とした学校建築。木造二階建て、外壁は下見板張り。全体の姿、形はなかなかのもの、当時の設計者や大工棟梁たちの技力量が偲ばれる。「白い紙ひこうき大会」の会場。九十四年間の星霜。

◇ 各校舎をめぐる中、そこに通った地元の人話を聞いた。楽しかったこととして誰でもが様に運動会をあげた。狭い校庭でじいちゃんばあちゃんも一緒になつてやった運動会。狭くても玉入れや騎馬戦などもできたことだろう。笑いこぼれる様が目に浮かぶ。みんなの交流の場であり、お互いの絆をつくる場であつたのだ。

各校舎とも、いまでも子供たちを待っている顔があつた。しかし、その顔には老いた深い皺が刻まれていた。人間でいへばもう天寿を全うした顔だ。心から「苦勞さまでした。もう十分動きましたよ」と言つて労りたい。みんな心の中でそう思い、その姿を懐かしい想い出として目に焼きつけ、心に刻んでいるはずだ。

二十一世紀に入った現在、閉校になったばかりでなく、その校舎の姿そのものを失おつとしている。人との絆をつくり、心の糧を育んでくれた学校。それを懐かしむ心、優しさやぬくもりを感じる感覚は、忘れてはならない大事なことであつた。だからこそ、これからはそれらを培う建築物や社会環境を、新しく創つていかなければなるまい。

「白い紙ひこうき大会実行委員会」の代表・安藤竜二さんの言つ「体が不自由になつたお年寄りでも、そばにいてくれるだけで家族の役割を果たすように、木造校舎も立っているうちに、そこに立たせておいてほしい。それだけで私たちは優しい時間を懐かしむことができ、優しい心を育てることが出来る」の言葉は重い。

「白い紙ひこうき大会」は今年の八月十日、十回目を迎えて最終大会となる。

（農的生活人「イラストも筆者」）
〓 毎月第3火曜日に掲載します